

日本金融学会活性化パネル

成城大学 村本 孜

1. 学会の活性化とは

- ・ここ4年ほど清水会長の下で、学会の活性化が常任理事会、理事会で行われてきた。
- ・とくに、常任理事会では長時間を費やして議論し、2006年9月以降WGが設置されて、精力的に議論された。
- ・日本金融学会が1943年の創設で、すでに65年の歴史を持つ以上、時代の要請、会員の興味に対応しての脱皮、変貌は常に課題である。
- ・応用経済学である貨幣金融論分野でも近接する学会としては、日本ファイナンス学会、日本金融・証券計量・工学学会、証券経済学会、生活経済学会などを上げることができる。
- ・活性化とは、学会としていかに情報発信可能か、参加する会員同士の議論が活発か、金融というすぐれて実務、制度、政策に直結する分野でのプレゼンスの確立等に集約され、その内容はWG報告（2007年4月）に詳しい。

2. 活性化をいかに達成するか

- ・活性化といっても、学会のメンバーの由来は多様である。純粹の大学人、金融分野の実務家、政策担当者、ジャーナリスト等多岐に亘る。その全て満足度を均霑することは容易ではない。
- ・学会としては、メニューを提供し、それに賛同する会員が積極的に関与するというスタンスにならざるえない（member-oriented）。
- ・機関紙編集委員長としての経験。
1996年～2001の5年間に投稿（再投稿を除く）77本
テーマ：金融政策関連20%、銀行・金融機関30%、国際金融10%、ファイナンス10%、金融理論系20%、その他10%（学説史、金融史、信用理論、個人金融など）
- ・多様性こそ日本金融学会の存在意義

3. 学会の活性化に向けて

①機関誌

- ・定期発刊を行う
- ・投稿論文だけの編集としない（共通論題、パネルなど）
- ・トピックコーナーのような大学人以外の論稿も

②大会

- ・報告数の増加
- ・とくに院生の報告増加⇒ポスターセッションの活用も
- ・プロコミの活用⇒今回のサブプライム問題などに機動的に対応

③学会賞

- ・2001年5月に提案したが、他機関との関係などから見送り。